

京都市動物園・京都府立植物園連携シンポジウム

いのちをつなぎ、いのちが輝く動物園・植物園になるために

動物園の役割は時代とともに変化してきました。動物福祉や環境保全への意識が高まり、最近ではSDGs（持続可能な開発目標）の取り組みが世界的な気運です。現代の動物園は、動物・人・自然、すべての「いのち」が輝く場所であること。そしてそれを市民の皆さんと共有できる学びの場でありたいと思っています。現在、「新たな『京都市動物園構想』」を進めています。そうした将来ビジョンを見据えて検討しています。

現在、動物園「京都の森」は田んぼや水路を整備して、絶滅危惧種のイチモンジタナゴの繁殖にも取り組んでいます。また、動物園ですがフタバアオイやチマキザサなどの稀少植物も展示し、環境教育にも取り組んでいます。

動物も植物も、人間を含めたすべての生きものの「いのち」はかけがえのないものです。今回、植物園と連携するシンポジウムでは、会場の皆さんと一緒に考え、活動していくきっかけにしたいと思います。

京都市動物園 園長 片山 博昭



今から250年以上も前から比較的最近に至るまで、動く生物は動物、動かない生物は植物として、地球上の全ての生物が動物と植物に分類されてきました（もちろん今の分類は違います）。日本で2番目に古い京都市動物園と日本で1番古い京都府立植物園が連携して、今日の共通の課題、すなわち生物多様性の保全への取り組みを府民・市民のみなさんにみていただくシンポジウムは全国でもおそらく例がありません。動物園も植物園もさまざまな動物や植物をみて楽しみ、さらに学んでいただくだけでなく、世界中で絶滅が始まっている野生の動物や植物を保全するという新たな役割をもつようになりました。植物園について言えば、約3割（10万種）の植物（花をもつ被子植物）が世界中の植物園で栽培・保全されています。絶滅危惧種の41%以上を、いわば域外保全しています。

このシンポジウムを通して、今後も動物園と植物園の役割と新たな取り組みに目を開いていただければ嬉しく思います。

京都府立植物園 園長 戸部 博



プログラム

令和元年9月8日（日） 10:00～12:30

於：京都府立京都学・歴彩館

10:00～ 開会あいさつ 片山 博昭（京都市動物園 園長）

基調講演

「ゴリラからの提言 - 動物の世界をもっと楽しむために」

山極 壽一（京都大学 総長）

11:00～ 動物園・植物園からの取組紹介

「京都市動物園における域外保全の取組」

長尾 充徳（京都市動物園）

「希少植物保全に向けた取組事例から」

平塚 健一（京都府立植物園）

11:30～ パネルディスカッション

「生物多様性保全について動物園と植物園は何ができるか」

コーディネータ： 湯本 貴和（京都大学霊長類研究所 教授・所長）

パネリスト： 池田 泰子（嵯峨美術大学 教授）

坂本 英房（京都市動物園 副園長）

瀬戸口 浩彰（京都大学大学院地球環境学堂／
京都大学大学院人間・環境学研究科 教授(両任)

西原 昭二郎（京都府立植物園 副園長）

山極 壽一（京都大学 総長）

12:30 閉会挨拶 戸部 博（京都府立植物園 園長）

動物園・植物園からの取組紹介

「京都市動物園における域外保全の取組」

長尾 充徳（京都市動物園）

生き物の保全は、「生息域内保全」と「生息域外保全」に分けられますが、域外保全は、危険分散として、生息地での環境破壊、伝染病などで生存が難しくなった場合に、生息地から安全な施設に保護をして、それらを育て、増やすことで絶滅を回避することを目的に行われます。

そして今や動物園、水族館、植物園は、その中心的な施設として貢献をしています。絶滅危惧種を育てる場合は、いつでも生息地に戻せるように「それぞれの生き物が持つ自然の性質を失わせないようにする」ことも、とても重要です。京都市動物園では、域内保全としてイチモンジタナゴ、国内野生動物の域外保全としてツシマヤマネコ、また国際的な希少種の域外保全として、ニシゴリラ、チンパンジー、グレビーシマウマ、ヤブイヌ、アジアゾウを重点種として取り組んでいます。今回は担当経験のあるツシマヤマネコとニシゴリラでの取り組みについて話をしたいと思います。



「希少植物保全に向けた取組事例から」

平塚 健一（京都府立植物園）

京都府立植物園は全国の他の植物園と同様に日本植物園協会に属しており、日本植物園協会と連携しつつ活動をしています。地域野生植物保全拠点園として近畿地方の植物を、特定植物保全拠点園としてラン科植物、カンアオイ類、ホトトギス類を保全しています。そのため当園

では平成27年に完成した絶滅危惧植物保全温室で栽培保全を行っており、絶滅危惧種園では植栽展示を行うことで希少植物保全活動の啓発に取り組んでいます。

保全活動の中でも特に京都府の植物の保全に関してお話ししていきたいと思っています。平成30年に京都府と京都大学の間で「植物多様性保全に関する教育及び研究の連携に関する協定」が結ばれ、重要事項の1つとなっているシカの食害が問題の京大芦生研究林、同じくシカの食害と、外来種との交雑に悩まされるキブネダイオウ、主には盗掘による影響で個体数が激減しているオオキンレイカ、そして京都市動物園のツシマヤマネコと同様に長崎県対馬市の植物の保全活動も始まったばかりですがご紹介いたします。



パネルディスカッション

「生物多様性保全について動物園と植物園は何ができるか」に寄せて
コーディネータ

湯本 貴和（京都大学霊長類研究所 教授／所長）



動物園や植物園の機能と役割は大きく変化しています。かつては海外のめずらしい動物や植物を飼育・栽培してみせるというエンターテイメントとしての機能が主たるものでしたが、次第に市民の憩いの場あるいは生物教育の場としての役割が大きくなってきています。とくに学校教育の新しい指導要領では、一方的に教科書や先生から教わるのではなく、自ら問題を発見し、自分で解答への道筋を考えていくというアクティブ・ラーニングが大幅に取り入れられます。目の前に生きた現物がある動物園や植物園を学校教育のなかでうまく位置付けることが、これまで以上に重要となってきています。

一方で、IPBES（生物多様性及び生態系サービスに関する政府間科学—政策プラットフォーム）の報告書は、現在 1 日に約 100 種の生物が絶滅しており、その速度は 100 年前の数万倍であると科学的根拠をもって国際社会に警告しています。動物園や植物園は貴重な遺伝資源を生きたまま保存し、絶滅に瀕した動植物を人工環境下で繁殖させて系統の維持を図るとともに、増殖させて自生地に戻す「ノアの箱舟」としての機能が注目されるようになりました。さらに自生地そのものの存続が懸念されている現在、動物園や植物園は国内外の希少な生き物を見ながら、その生息地の状況に思いをはせる「窓」としての役割を果たすべき時代となっています。

このように、これまでになかったさまざまな社会的な機能と期待を担わなければならなくなった動物園や植物園。限られた予算や人材のなかで、どのように機能と期待に応えていけばいいのでしょうか。いままでも動物園や植物園は多くの市民や事業者のボランティアに支えられてきました。しかし、今後はこれまで動物園や植物園にそれほど関わってこられなかった方々がもっと活動に参加したくなるような動物園や植物園にする工夫が必要なのではないでしょうか。

京都市や京都府の生物多様性地域戦略を考えていくうえで、数少ない現場である動物園や植物園の未来像を一緒に考えていきたいと思います。

パネリスト

池田 泰子（嵯峨美術大学 教授）

つな
繋ぎ、学び、夢見る場としての動物園、植物園



365 日いのちに向き合う生き方ができるのが、動物園・植物園の人たちです。お風呂に入っている、トイレに入っているも頭のまん中にいつも担当の動物や植物が居座っている。お風呂に入っていたって、突然「そうだ！草の種類を混ぜてみよう」て思いつくのでは。ほかの職業では体験できない羨ましい人生です。私は 365 日いのちとお客を見つめてきた彼(女)らが「生き物の専門家としてこれだけは誰かに伝えたい、いのちの話」をぼそぼそと話す話を聞き出す楽しさの中毒になってしまい、気がつけば動植物園とのおつきあいが四半世紀を超えてしまいました。デザイナーは人に必要な情報を形にして渡すのが仕事です。私の頭の中は誇りを持って大したものが入っていない。スカスカのスポンジのような私の頭に、いのちに向き合う本物の体験の話が流れ込むと、まるで同じ体験をしているかのような錯覚に陥り、心から協力したい=同じ夢を見たいと思うのです。

坂本英房（京都市動物園 副園長）

野生生物への恩返し

野生生物の多様性の保全のために、動物園は何ができるのでしょうか。京都市動物園で飼育・展示している 120 種のうち 25 種が絶滅の恐れのある動物たちで、国内だけではなく、海外の動物園との協力しながら繁殖を進めています。なかでも、日本の絶滅危惧種であるツシマヤマネコと京都府の絶滅寸前種であるイチモンジタナゴについては野生復帰も視野に入れ、繁殖に力を入れています。



動物園で暮らす動物たちを通して、絶滅の恐れのある動物たちの現状や保全の取り組みをお客様に伝えることは動物園のとても大切な役割の 1 つです。そのためには、フィールドの研究者からもたらされる情報と「伝える」プロであるデザイナーの存在は重要です。また、自然界において、動物だけでは生きていくことはできません。植物も含めて多様性を守ることが重要です。動物園と植物園の技術者、野生動植物の研究者、そしてデザイナーが協力すれば、野生生物への恩返しに貢献ができるのではないのでしょうか。

瀬戸口浩彰（京都大学 大学院地球環境学堂
生物多様性保全論分野）

京都の植物園の^{たの}しみかたと社会的役割

自らの子育ての経験、そして最近に動物園と植物園を意識しながら見学して、歴然とした違いに気が付きました。それは、動物園には子供が多い、植物園にはシニアが多いということです。おそらくこの違いは、知識や経験を積んだシニア層は、解説なしに植物の魅力を感じることができる一方で、子供には伝わっていない為だと思うのです。植物には表情や感情がありません。声も出しませんし、動きません。本当は植物にも香りや味、葉の触感、巧みな生き残りの工夫、人の暮らしとつながる情報がたくさんあるのです。皆さんのご家庭の台所には、沢山の野菜や果物が原型のまま置いてあるでしょうが、お肉はパック詰めになっているだけですよね。植物を、もっとも身近に、暮らしのなかに感じるための「展示解説の工夫」を重ねて、多くの子供に植物好きになって貰いたい。

また、日本の絶滅危惧種 3676 種のうちの 55%以上は植物です。植物は 2017 種が絶滅危惧種です。テレビ番組で取り上げられる頻度から、絶滅危惧種と言えばほ乳類や鳥類が主役のようなイメージを私たちは抱きがちですが、ほ乳類はわずかに 33 種、鳥類は 98 種です。2000 種を超える植物とは桁数が違います。国はいま絶滅危惧種のなかから、特に重要な種（国内希少野生動植物種）を増やす選定作業を進めていますが、この中の植物の割合は激増する予定です。これは皆さんが選挙で選んだ国会議員がきめたことなので、粛々と進めることなのですが、この保護の中心になるのが植物園です。地域の植物に植物園がどれだけ責任を果たせるのかが、社会的に問われる時代になりました。



西原昭二郎（京都府立植物園 副園長）

いのちをつなぎ いのちが輝く（生物多様性保全）
ために植物園は何ができる！？

「なぜこんな花の形？」「なぜ夜咲くの？」「なぜこの季節に花が咲く？」「なぜ紅葉するの？」「えっ 昨日と花色がちがう！」「えっ 昨日から少し形変わった！？」

植物園に来る子供達の頭の中を「なぜ？」「あれっ？」で一杯にしたい。走って逃げる事ができない植物がその地を選び命をつないできた驚きや不思議に「気づいて欲しい」「観察して欲しい」。その驚きや不思議、疑問を多くの子供達や来園者に伝えることで、植物への興味が湧き、その植物（生き物）を守りその命をつなぎたいと思う人々の裾野が広がっていくことと思っています。そのことは、直接的な希少植物の栽培・保全と併せて「生きた植物の博物館」としての大きな役割であり、そんな役割を果たしていける植物園で在りたい。





京都市動物園・京都府立植物園連携シンポジウム
「いのちをつなぎ、いのちが輝く動物園・植物園
になるために」

主 催 京都市動物園，京都府立植物園

後 援 京都大学霊長類学・ワイルドライフサイ
エンス・リーディング大学院

問合せ先 京都市動物園 総務課

電話：075-771-0210

FAX：075-752-1974

ただし、休園日を除く。

※本事業は宿泊税を活用しています。